ひらきぶみ

与謝野晶子

みだれ髪

君

事なく着きし電報はすぐ打たせ候ひしかど、この文は二日おくれ候。光（ひかる）おばあ様を見覚えをり候はずなく、あたり皆顔知らぬ人々のみなれば、私の膝（ひざ）はなれず、ともすればおとうさんおとうさんと申して帰りたがりむづかり候に、わが里ながら父なくなりて弟留守にては気をおかれ、筆親（したし）み難かりしをおゆるし下さ
れたく候。

こちら母思ひしよりはやつれ居給(いたま)はず、君がかく帰し給ひしみなさけを大喜び致し、皆の者に誇りをり候。おせいさんは少しならず思ひくづをれ候すがたしるく、わかき人をおきて出(い)でし旅順(りよじゆん)の弟の、たび〳〵帰りて慰めくれと申しこし候は、母よりも第一にこの新妻(にいづま)の上と、私見るから涙さしぐみ候。弟、私へはあのやうにしげ〳〵申し参りしに、宅へはこの人へも母へも余り文おくらぬ様子に候。思へば弟の心ひとしほあはれに候て。

おん礼を忘れ候。あの晩あの雨に品川(しながわ)まで送らせまつり、お帰りの時刻には吹きぶり一層加(くわわ)り候やうな

りしに、殊(こと)にうすら寒き夜を、どうして渋谷(しぶや)まで着き給ひし事かと案じ〳〵致し候ひし。窓にお顔見せてプラットホームに立ち居給ひし父様の俄(にわか)に見えず成り給ひしに、光(ひかる)不安な不思議な顔して外のみ眺(なが)め、気を替へさせむと末(すえ)さま〴〵すかし候へど、金(きん)ととの話も水ぐるまの唱歌も耳にとめず、この小(ちい)さき児(こ)の胸知らぬ汽車は瞬(また)く内に平沼(ひらぬま)へ着き候時、そこの人ごみの中にも父さま居給ふやと、ガラス戸あけよと指さしして戸に頭つけ候に、そとに立ち居し西洋婦人の若きが認めて、帽に花多き顔つと映(うつ)し、物いひかけてそやし候思ひがけなさに、危く下に落つるばかりに泣きころ

げ来(きた)り候。その駭(おどろ)きに父さまの事は忘れたらしく候へば、箱根へかかり候まで泣きいぢれて、よう寐(ね)てをり候秀(しげる)を起しなど致し候へば、また去年の旅のやうに虫を出だし候てはと、呑(の)まさぬはずの私の乳啣(ふく)ませ、やつとの事に寐かせ候ひしに、近江(おうみ)のはづれまで不覚に眠り候て、案ぜしよりは二人の児は楽に候ひしが、私は末(すえ)と三人を護(まも)りて少しもまどろまれず、大阪に着きて迎への者の姿見てほつと安心致し候時、身も心も海に流れ候人のやうに疲れを一時に覚え候。

車中にて何心なく『太陽』を読み候に、君はもう今頃御知りなされしなるべし、桂月(けいげつ)様の御評のりをり候

に驚き候。私風情(ふぜい)のなま〳〵に作り候物にまでお眼お通し下され候こと、忝(かたじけな)きよりは先づ恥しさに顔紅(あか)くなり候。勿体(もつたい)なきことに存じ候。さはいへ出征致し候弟、一人の弟の留守見舞に百三十里を帰りて、母なだめたし弟の嫁ちからづけたしとのみに都を離れ候身には、この御評一も二もなく服しかね候。

私が弟への手紙のはしに書きつけやり候歌、なになれば悪(わ)ろく候にや。あれは歌に候。この国に生れ候私は、私らは、この国を愛(め)で候こと誰にか劣り候べき。物堅き家の両親は私に何をか教へ候ひし。堺(さかい)の街(まち)にて亡(な)き父ほど天子様を思ひ、御上(おかみ)の御用に自分を忘れ

し商家のあるじはなかりしに候。弟が宅（うち）へは手紙ださぬ心づよさにも、亡き父のおもかげ思はれ候。まして九つより『栄華（えいが）』や『源氏（げんじ）』手にのみ致し候少女は、大きく成りてもます〳〵王朝の御代（みよ）なつかしく、下様（しもざま）の下司（げす）ばり候ことのみ綴（つづ）り候今時（いまどき）の読物をあさましと思ひ候ほどなれば、『平民新聞』とやらの人たちの御議論などひと言ききて身ぶるひ致し候。さればとて少女と申す者誰も戦争（いくさ）ぎらひに候。御国のために止（や）むを得ぬ事と承りて、さらばこのいくさ勝てと祈り、勝ちて早く済めと祈り、はた今の久しきわびずまひに、春以来君にめりやすのしやつ一枚買ひまゐらせたきも我慢

して頂きをり候ほどのなかより、私らが及ぶだけのことをこのいくさにどれほど致しをり候か、人様に申すべきに候はねど、村の者ぞ知りをり候べき。提灯（ちょうちん）行列のためのみには君ことわり給ひつれど、その他のことはこの和泉（いずみ）の家の恤兵（じゅっぺい）の百金にも当り候はずや。馬車きらびやかに御者馬丁（ぎょしゃばてい）に先き追はせて、赤十字社への路に、うちの末（すえ）が致してもよきほどの手わざ、聞（きこ）えはおどろしき繃帯巻（ほうたいまき）を、立派な令夫人がなされ候やうのおん真似（まね）は、あなかしこ私などの知らぬこと願はぬことながら、私の、私どものこの国びととしての務（つとめ）は、精一杯致しをり候つもり、先日××様仰せられ候、

筆とりてひとかどのこと論ずる仲間ほど世の中の義捐（ぎえん）などいふ事に冷（ひやや）かなりと候ひし嘲（あざけ）りは、私ひそかにわれらに係（かか）はりなきやうの心地（ここち）致しても聞きをり候ひき。

君知ろしめす如し、弟は召されて勇ましく彼地へ参り候、万一の時の後の事などもけなげに申して行き候。この頃新聞に見え候勇士々々が勇士に候はば、私のいとしき弟も疑（うたがい）なき勇士にて候べし。さりながら亡き父は、末の男の子に、なさけ知らぬけものの如き人に成れ、人を殺せ、死ぬるやうなる所へ行くを好めとは教へず候ひき。学校に入り歌俳句も作り候を許され候

わが弟は、あのやうにしげ〳〵妻のこと母のこと身ごもり候児（こ）のこと、君と私との事ども案じこし候。かやうに人間の心もち候弟に、女の私、今の戦争唱歌にあり候やうのこと歌はれ候べきや。

私が「君死にたまふこと勿（なか）れ」と歌ひ候こと、桂月様たいさう危険なる思想と仰せられ候へど、当節のやうに死ねよ〳〵と申し候こと、またなにごとにも忠君愛国などの文字や、畏（おそれ）おほき教育御勅語（ごちよくご）などを引きて論ずることの流行は、この方かへつて危険と申すものに候はずや。私よくは存ぜぬことながら、私の好きな王朝の書きもの今に残りをり候なかには、かやうに

人を死ねと申すことも、畏(おそれ)おほく勿体(もつたい)なきことかまはずに書きちらしたる文章も見あたらぬやう心得候。いくさのこと多く書きたる源平時代の御本にも、さやうのことはあるまじく、いかがや。

歌は歌に候。歌よみならひ候からには、私どうぞ後の人に笑はれぬ、まことの心を歌ひおきたく候。まことの心うたはぬ歌に、何のねうちか候べき。まことの歌や文や作らぬ人に、何の見どころか候べき。長き〳〵年月(としつき)の後まで動かぬかはらぬまことのなさけ、まことの道理に私あこがれ候心もち居るかと思ひ候。この心を歌にて述べ候ことは、桂月様お許し下された

く候。桂月様は弟御(おとうとご)様おありなさらぬかも存ぜず候へど、弟御様はなくとも、新橋(しんばし)渋谷などの汽車の出で候ところに、軍隊の立ち候日、一時間お立ちなされ候はば、見送の親兄弟や友達親類が、行く子の手を握り候て、口々に「無事で帰れ、気を附けよ」と申し、大ごゑに「万歳」とも申し候こと、御眼と御耳とに必ずとまり給ふべく候。渋谷のステーションにては、巡査も神主様も村長様も宅の光(ひかる)までもかく申し候。かく申し候は悪ろく候や。私思ひ候に、「無事で帰れ、気を附けよ、万歳」と申し候は、やがて私のつたなき歌の「君死にたまふこと勿れ」と申すことにて候はずや。

彼れもまことの声、これもまことの声、私はまことの心をまことの声に出だし候とより外に、歌のよみかた心得ず候。

私十一ばかりにて鷗外（おうがい）様の『しがらみ草紙』、星川様と申す方の何やら評論など分らずながら読みならひ、十三、四にて『めざまし草（ぐさ）』、『文学界』など買はせをり候頃、兄もまだ大学を出でぬ頃にて、兄より『帝国文学』といふ雑誌新たに出でたりとて、折々送つてもらひ候うちに、雨江（うこう）様桂月様今お一人の新体詩その雑誌に出ではじめ、初めて私藤村（とうそん）様の外に詩をなされ候方（かた）沢山日本におありと知りしに候。その頃からの詩人

にておはし候桂月様、なにとて曾孫（ひまご）のやうなる私すらおぼろげに知り候歌と眼の前の事との区別を、桂月様どう遊ばし候にや。日頃年頃桂月様をおぢい様のやうに敬（うやま）ひ候私、これはちと不思議に存じ候。

なほ桂月様私の新体詩まがひのものを、つたなしく〳〵、柄になきことすなと御深切（しんせつ）にお叱（しか）り下され候ことかたじけなく思ひ候。これは私のとがにあらず、君のいつも〳〵長きもの作れと勧め給ふよりの事に候。しかしまた私考へ候に、私の作り候ものの見苦しきは仰せられずとものこと、桂月様をおぢい様、私を曾孫と致し候へば、御立派な新体詩のお出来なされ候桂月

様は博士、やう〱この頃君に教へて頂きて新体詩まがひを試み候私は幼稚園の生徒にて候。幼稚園にてかたなりのままに止め候はむこと、心外なやうにも思ひ候。

　かやうなること思ひつづけて、東海道の汽車は大阪まで乗り通し候ひき。光（ひかる）今夜はよく眠り候へば、うつかり長きこと書きつらね候かな、時計は朝の壱時を打ち候に。君も今頃は筆おき給ふ頃、坊たちがをらで静なる夜に何の夢か見給ふらむ。今日父の墓へまゐり候。去年のこの頃しのび候て、お寺の廊の柱にしばらく泣き申し候。

光は末（すえ）が負（お）ひて竹村の姉の許（もと）へ、天神様の鳩（はと）を見になど行き候。かしこに猿もあり、猿は行儀わろきもの故（ゆえ）見すなといひきかせ候。おばあ様は秀（しげる）を頬（ほお）ずりし給ひ、もう今から、帰つたあとでこの児が一番心にかかるべしと申され候。光は少しもここの人たちに馴（な）れず、またしては父さんへのん〳〵［＃「のん〳〵」に傍点］と申し、末（すえ）と大道へのみ出たがり候。

汽車中にてまた新版の藤村様御集、久しぶりに彼君（かのきみ）のお作読み候。初（はじめ）のかたは大抵そらにも覚えをり候へば、読みゆく嬉（うれ）しさ、今日ここにて昔の箏（こと）の師匠に逢（あ）ひしと同じここちに候ひし。宅の土蔵の虫はみし版

本のみ読みならひて、仮名づかひなど、さやうのことどうでもよしと気にかけず、また和文家と申すもの大嫌ひにて、学校にてもかかるあさはかにものいふたぐひの人にわれ習はじとて、その時間に顔出さざりしひがみ今に残り候私なれど、この御集のちがひやう私にも目につき候は、さはいへあやしき襟（えり）かけし少女をくちをしと見る思（おもい）に候。

天眠様精様京の光子様お逢ひしたき人多けれど、かう児どもつれてはいかが致すべき。

帰る日まで申さじと思ひ候ひしが、胸せまりて書き添へまほしくなり候。そはやはりふるさとは詩歌の国

ならず、あさましきこと憂きこと、きのふの夕より知りそめしに候。

竹村の姉がり訪ひしに、私は聞かでもよきこと、姉は語らではあられぬこと耳に致し、人の子に否とこたへしわが名、もとよりなりと何も〳〵思ひすてをり候ものを、をみななり、今更に悲しう、父あらぬ身をわびしと思ひ知り候。母も宅の者誰もその事しらず候へど、姉より聞けば、むかひ側の家今は人の家なれば、私帰るともそこへは一歩もふむをゆるすなと、はる〴〵英国より△△まで。——君おしはかり給へ。——それにその人、私の着くとやがて来て、ちと来よな

ど、さりとは知らぬおとしあな、おそろしの世と知り候。かなたの湯殿(ゆどの)に母も弟の思へる人も入りに行けど、さらばわれは踏むまじく、東京のせん湯に入りつけてはと母には申して、子らつれておあし持ちて横町の湯へまゐれば、見知れるらしき人ありて眼をそばだて候。椿(つばき)の葉にて私のをさなき時に乳母がせしやう光(ひかる)に草履(ぞうり)つくりてやりたくと、彼の家の庭をあやにくや見たうも〳〵思へど、私はゆかず候。かしこの土蔵には弟どう思ひてか出立の前に、私のちひさき時よりの本と自分のと別々にしらべてまとめおき候よし、さ聞きて俄(にわ)かにその本こひしく、お祖母(ばあ)様の手垢(てあか)父の手垢の

うへに私の手垢つきしかず〳〵、また妹と朱など加へし『柵草紙（しがらみそうし）』のたぐひ、都へも引きとらまほしく、母ゆるさば、父のいつもおもかげうつし給ひし大きな姿見（すがたみ）もろとも、蒲団（ふとん）になとくるませて通運に出さすべく候。

母ます〳〵文学狂になり候て、よべも歌の話いろ〳〵と致し、君の祭見る日の下加茂（しもがも）の橋はつまらずと申し、大井川濃き緋（ひ）の帯のいくたりの鼓拍子に船は離れぬは、かしこの景色すきなるものから、それはよしと喜びていくたびも口ずさみ候。また松田などや申し候ひけむ、山の人とはきつとおえらき人なるべし、

物言ひのてきはきして心の奥にかげなきは、江戸のお生れの人かと申し候ゆゑ、あれは緑雨(りょくう)様や宅のお友達、数学の天才にて、こちらの朝日の角田様も古く知り給ふ方(かた)、当節は文学を専門になさる人たちよりも、かやうな学問のちがひし人様の方々に、まことのおえらき人あるなりと申し候へば、いつの世でも大抵はさうと、母たいさう知つたかぶりな顔を致し候。

　庭のコスモス咲き出で候はば、私帰るまであまりお摘(つ)みなされずにお残し下されたく、軒の朝顔かれ〴〵の見ぐるしきも、何卒(なにとぞ)帰る日まで苅(か)りとらせずにお置きねがひあげ候。

あす天気よろしくば、光に堺の浜みせてやれと母申して寐たまひ候。

(『明星』一九〇四年一一月)

底本：「与謝野晶子評論集」岩波文庫、岩波書店
　　１９８５（昭和60）年８月16日初版発行
　　１９９４（平成６）年６月６日10刷発行
初出：「明星」新詩社
　　１９０４（明治37）年11月号
入力：Nana ohbe
校正：門田裕志
ファイル作成：野口英司
２００２年１月10日公開
青空文庫ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

●表記について

・本文中の「〱」は、二倍の踊り字（「く」を縦に長くしたような形の繰り返し記号）。
＊濁点付きの二倍の踊り字は「〲」。